

終末期における終末期ニーズの特徴から考えるスピリチュアリティとスピリチュアルケア
終末期患者と青年期男女の終末期ニーズの比較を通して

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
長岡 敬子

終末期医療の中では、生きる意味や目的に関する問題がスピリチュアルペインやスピリチュアルニーズとして取り扱われ、それに対してスピリチュアルケアが行われている。

本研究では、終末期におけるスピリチュアルペインを含む苦痛やニーズの特徴を、青年期のニーズと比較検討することによって明らかにし、特徴をふまえてスピリチュアリティやスピリチュアルケアについて考察を述べた。

研究対象は、スピリチュアルケアに関する日本の事例論文から抽出した、終末期の苦痛とニーズ及びスピリチュアルケアの記述である。

青年期と比較した結果、終末期特有のニーズや特徴が理解された。それは、愛情を向ける対象が男女関係に限定せず広がっている可能性、家族や他者を思いやり具体的な社会的貢献を願う姿、人とのつながりや自己実現を最期まで求める姿、苦悩に直面し生きる意味を問う中で罪責感や後悔などから既存の価値観が崩される姿、それでも希望を持ち新しい生き方を模索する姿、自然への回帰願望が示されなかったこと、神や魂や死後の世界などを想定する姿であった。また、終末期のニーズは日本人のスピリチュアリティの内容と重複することも理解された。

終末期の人が青年期と違う姿を示したことから、終末期の苦痛を発達課題や学びの機会であると捉え、苦痛を軽減するだけでなく苦痛への直面を支えることが重要なスピリチュアルケアになりうると考える。また、スピリチュアリティと関連する終末期のニーズに対応するスピリチュアルケアは、人が最期までよりよく生きて、納得して死ぬために必要なものだと考える。